いうことは、この発見されるまでは聞かれなかった。

その次にくるのが弥生文化といわれるもので、その名称は、東京都の、上野公園の台地と不忍池を隔てた、東京大学のある弥生が丘より最初発掘されたので、その地名が付され、農耕文化をもった、われわれの祖先がこれにつながるものであろうと考えられているものである。時代を明確にすることは、場所や遺物にもいろいろあって、専門家は編年表をつくって時代の考証をしているが、大体は西暦でいう紀元の最初頃であろうといわれている。会津地方の、日本文化の開発過程からみて、それよりはやや下る時代と想定して、大体間違いはなかろうと思われる。その頃既に、盆地底の中州の一部が開拓されて、農耕が行なわれ、人が住みついていたことになるので、貴重な遺跡である。大要を小滝調査報告書によって述べてみる。

場所は今和泉部落より麻生に向う道路を、南に二九〇メートルほど行った、道路の西側で、字町畑地内、標高は二〇〇メートルになっている。今和泉は部落の名が示しているように、大川扇状地の末端に近い湧水地帯で、遺跡地のすぐ西に湧水があり、小川が流れている。旧鶴沼川の氾濫地で、その中州に当る、やや高みの、今和泉坂場啓次の畠地で、その床上げをした際出土したものである。

上には黒褐色又は褐色の土が三〇～六〇センチかむっており、その下に二〇センチほどの黄褐色の粘質砂層があるが、遺物は大体その層に含まれていた。特にその集って採集された場所は、東の道端近い、径三メートル以内くらいの、木炭片の多く散布する、炉のあった跡とみられる周辺で、出土品は、壺形台付・深鉢形・浅鉢形の土器数種、それに俗にやのね石といっている石鏃・磨石・凹石・磨製石斧などで、精製されたものに、粗製のものも含み、土器には縄文、刷毛目文などのものがある。

この荒い縄文に篦で描いた沈線文があり、磨消した手法がみられるところから、弥生式でも相当古いもの、弥